

念仏者は、無碍の一道なり。そのいわれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も業報を感ずることあたわず、諸善もおよぶことなきゆえに、無碍の一道なりと云々

第5組 天正寺住職

第7章「念仏者は無碍の一道なり」

嶋地 正孝

Text by Shimachi Shoukou

天親菩薩は如来の本願のはたらきを「帰命尽十方無碍光如来」といただかれました。曇鸞大師は「帰命」を礼拝門、「尽十方無碍光如来」を讚嘆門と了解されました。讚嘆とは起こるはずのないことがこの身に起こった、その驚きと謝念をもってなされるものです。「念仏者は無碍の一道なり」と語られる第七章は本願念仏が私のいのちにまでなったことへの讚嘆なのです。

聖典の注には『「念仏者は」の「は」はその上の「者」を「は」とよむということを示すための捨て仮名』と書かれています。しかし古来より多くの先師は「念仏者」の「者」は人として読まれてきました。法は常住不変であり時を持ちません。機を持って働き出します。「行巻」に「大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり」とありますように本願念仏にかない、念仏申している人の姿、生き様、言葉にまでなって私の所に届けられているのです。しかしそれは自分の人生になんの碍り、妨げがなくなったということではありません。「光如来」なるはたらきによって「有得」なる自身が照らされた事実であり、自身の慙愧なのです。

『論註』に「碍は衆生に属す、光の碍にあらざるなり」と教えられます。曇鸞大師は如来との出遇いに「碍」を見つめていかれました。そこに譬えとして、日の光が見えない盲目の人、雨が降りそそいでも染み入ることがない頑なな石が語られます。これは盲目の人を侮辱した言葉ではなく、本願に出遇いながら

そのことを喜ばず、この世の幸福を願う心から一步も出ることができない悲しみなのです。親鸞聖人が「化身上卷」に「すでにして悲願います」と言われるように、悲願ましますがゆえに私達は「有碍」なる身の悲しみを知り、その身を背負い立ち上がっていくのです。

「そのいわれいかんとならば」から続く文章は単なる理由を述べているのではないのです。もし理由があるとしたら如来の本願であるはずです。しかし、ここに語られていることは共に念仏のいのちの中に生き、念仏のいのちを生き合う者として開かれてくる生活なのです。私達はいつも周りの状況、人間関係に振り回されて生きています。如来はそのような私達を「群生」。群がり生きる者とお呼びになります。天神に幸福を願い、人間を気持ちよくさせるものに惑わされ、不安を感じ、わずかな解決策を試みます。そういうことがなくなったのを念仏者と言っているのではないのでしょうか。むしろ如来のいのちを生きる者となった時、この弱き人間こそ私の姿でありました。

自他分別の差別を生きる人間の上に円融無碍なる世界が不思議にも開かれるのです。老病死の事実の前に愚癡、後悔、ため息が起こる。そこに「十方衆生よ」と呼びかける如来の悲願を感じ合い、共に浄土を願っていくのです。その心を聖人は「念仏もうさんとおもいたつころ」といただかれたのでしょうか。その心の前には何物も障碍することはできないのです。

私にとって「碍」としか感じるできないこの世界と身を、願生浄土の歩みを促して下さる大切な機縁として背負っていくのです。「生きることが辛い」と嘆く者に、「頑張ろう」という励まし、慰めの言葉でなく「人間と生まれたことは辛く、悲しいけど生きていこう」と生き合っていける道が「念仏者は無碍の一道なり」と言われているのではないのでしょうか。